

Title	後葉和歌集の誹諧歌
Author(s)	佐藤, 明浩
Citation	詞林. 1988, 3, p. 37-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67252">https://doi.org/10.18910/67252</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

一

藤原為経撰『後葉和歌集』（久寿二年末頃成立）は、当代の勅撰集である『詞花集』への批判から、これを改撰するという形で編まれた私撰集である。その巻十八・雜三は、巻頭部分に長歌二首が置かれており、次に旋頭歌四首、短歌一九首が続いている。これは、『古今集』巻十九・雜体の長歌、旋頭歌、誹諧歌という構成に倣ったものと思われ、形式的にはこれとほぼ対応している。したがって、『後葉集』巻十八の短歌一九首は、誹諧歌として集められたものと考えられる。

ところで、『俊頼隨腦』に次のような誹諧歌についての記述がある。

次に誹諧歌といへるものあり。これよく知れるものなし。又髓腦にも見えたることなし。古今についてたづぬれば、ざれごと歌といふなり。よく物いふ人の、ざれたはぶるゝが如し。

うめの花みにこそ来つれうぐひすの人く人くといとひしもする

佐藤明浩

秋の野になまめき立てる女郎花あなごとごとし花もひとと、き

是がやうなることばある歌はさもと聞ゆる。さもなき歌のうるはしきことばあるは、なほ人に知られぬことにや。宇治殿の四条大納言にとはせ給ひけるに、これはたづねおはしますまじき事なり。公任あひとあひし先達どもに、随分に尋ねさふらひしに、さだかに申す人なかりき。さればすなはち後撰、拾遺抄にえらべることなしと申されければ、さらばすぢなき事なりと申してやみにきとぞ帥大納言におはせられける。それに通俊中納言の後拾遺抄といへる集をえらびて、誹諧歌を撰べり。若しおしはかりごとによ。これによりて異事もおしはかるに、はかばかしき事やなからむとこそ申されしか。（注1）

平安時代の後期、『俊頼隨腦』によれば既に公任の時代に、『古今集』の誹諧歌がいかなるものであるのかがわからなくなっていたという事情を知ることができる。以後、『和歌童蒙抄』『奥義抄』などの歌書にも誹諧歌に関する記述がみえるが、當時において統一した見解をみるには至っていない（注2）。こ

うした背景のもとに『後葉集』に誹諧歌群がおかれたのである。

この時代、誹諧歌といった場合、歌人ごとにその解釈は微妙に異なっていたであろう。そのようななかにおいて、後葉集撰者為経がどのような誹諧歌観をもっていたかがまず明らかにされなければならない。また、それが当時の誹諧歌観全体においてどのような位置を占めていたかも問題となってくる。この二つの関心に支えられながら、本稿では前者について具体的な解明を試みることにしたい。

この問題に関しては、既の上條彰次氏が触れておられる（注3）。上條氏は誹諧歌を古今的誹諧歌と後拾遺的誹諧歌に分けられた上で、『後葉集』の誹諧歌を古今的誹諧歌の流れの上に位置づけられた。大筋においてはこの見解にしたがうものであるが、後葉集誹諧歌の存在が「古今的誹諧歌の流れが、個人と良い歌集といひ決して消滅してはいなかったこと」を指摘するに足るものかどうかには疑問を持つものである。以下、個々の例をとりあげながら、具体的に検討を加えていくことにする。

## 二

後葉集誹諧歌一九首のうち源俊頼の歌が五首（注4）を占めているのは注目される。俊頼歌は『後葉集』に二六首採られており第一位の入集数を示している。しかしながら、俊頼歌の入集数は、

春上：三首 春下：三 秋上：二 秋下：一 冬：一

物名：三 恋二：一 雑一：二 雑二：二 雑三：七

雑四：一（その他の部立には一首も採られていない。）

というように部立ごとに不均衡がみられ、雑三の七首は注目すべき数字であることがわかる。誹諧歌一九首中五首という数はかなり大きな比重を占めているといえる。一応、為経は俊頼のある種の歌に誹諧歌としての特質を認めていたという見通しを持つことができる。

それでは、具体的に、誹諧歌とされた俊頼歌をみていこう。

A雪の色をぬすみてさける卯花はさえてや人にうたがはるらん（後葉集・五四五）（注5）

この歌は卯の花が雪の白さを連想させるといふ発想に基づいている。卯の花を雪に見立てる歌は既に『後撰集』にみえ（巻四・夏・一五三など）、

うのはなのさけるあたりはときならぬゆきふるさとのかきねとぞみる（後拾遺集卷三・夏・一七四 能宣）（注6）  
などの作もあって、当時としては常套的・伝統的なものであったと思われる。『後葉集』巻三・夏にも、

あらしのみさむきみ山の花はきえせぬ雪とあやまたれつつ（八六 兼盛）

という歌があり、為経もこうした発想の歌を正統的な季の歌として評価していたことがわかる。したがって、卯の花↓雪という連想をもって誹諧歌と判断したのではないといえる。

Aの歌で問題となるのは、「ぬすむ」「うたがはる」という語句の使用であろう。Aは『詞花集』巻二・夏にも入っていたが、「ぬすむ」という語は、この歌を含めて八代集に二例しか見られず、和歌に詠むにはやや俗的な表現であると意識されていたと考えられる。さらに、下句で「うたがはるらん」と縁語的に受けることによって、泥棒のイメージが強く付与されており、為経はこのような点に注目して誹諧歌に入れたのではないかと思われる。『六百番歌合』の慈円歌、

あらはれむあきをしらぬかへでかなときはの色をしばし  
ぬすみて(夏・三番・新樹・右持)

に対して、「左方申云、かへでかなといひ、しばしぬすみてとはてたる、頗似凡鄙」という論難が出され、俊成が「右は誹諧の為体之上、かへでの心もいかごと、持とすべくや」と判を下している。ここでも、「誹諧」の体と判断された要因の一つに「ぬすむ」の語の使用が挙げられるであろう。後代の資料になるが、『新統古今集』巻一九・雑下の誹諧歌に、

あやなくも風のぬすめる梅の香にをらぬ袖さへうたがはれ  
ぬる(二〇五九 重保)

という歌が採られていることも、「ぬすむ」「うたがはる」という語句の使用が誹諧の概念と結び付いていることを示唆している。これも後代のものだが、広島大学蔵『詞花集』の注にAの歌について、「此集は、詞の花を専にするといへども、あまり是は狂歌めきたり」(注7)とあり、この歌を誹諧歌的なもの

のとらえるのは、為経の個人的な判断にとどまらず、一般性をもつものであったと考えられる。

また、次のようなことも考慮にいれてよいかも知れない。題詠『詞花集注』にAの歌について、

万葉云、雪ノ色ヲウバヒテサケル梅花イマサカリナリミム  
人モガナ(万葉集巻五・八五四)。此ウバヒテサケルト云  
詞ヲ模シテ、ヌスミテサケルト読歎。(注8)

とあるように、この俊頼歌は万葉集歌に基づいたものである。今詳しく述べる余裕はないが、為経は万葉的表現をもつ歌については、消極的ないしは否定的な態度をとっていることが知られる(注9)。その点からみれば、Aの歌が万葉の表現によったものであったことも、これを誹諧歌に含めた理由の一つとして挙げることができるのではないであろうか。

他の俊頼歌に目を向けよう。

B春くれどをる人もなきさわらびはいつかほどろとならむと  
すらん(後葉集・五四一)

「ほどろ」は、藤の伸びすぎて開いてしまったものを言うの  
であろうが、俊頼以前の用例を知らない。少なくとも、歌語と  
して伝統的に用いられてきたものではないようである。西行の、  
なほざりにやきすてしのさわらびはをる人なくてほどろ  
とやなる(山家集・一六一)

という作はBの俊頼歌の影響下にあると考えられるが(注10)、  
「ほどろ」という、和歌の伝統的表現から逸脱した語の使用に、

西行は興味を持ったものと想像される。そして、為経はこうした、いわば非歌語の使用をもって、誹諧歌と判断したのであるう。

C 風吹ばならのうらばのそよそよといひあはせつついづち行らん（後葉集・五五〇）

『詞花集』では冬の部に入れられていたこの歌を、為経は誹諧歌として採っている。下句は散文的ないしは口語的表現とみることができ、為経の措置は、そうした伝統的和歌表現からの逸脱を念頭に置いてのものであったと考えられる。

D 秋の田にもみぢ散ける山里をこともおろかにおもひける哉

（後葉集・五四八）

についても、同様のことが言える。「こともおろかに」という俊頼以前の和歌に用例の見いだせない語を、伝統的言語の範疇から外れたものとみて、この歌を誹諧歌に含めたものであろう。

A~Dの俊頼歌の検討から、為経においては、俗語、口語ないしは非歌語といった、伝統的和歌表現（三代集がその規範と考えられる）から逸脱したものを含む歌を誹諧歌と規定する一面があったことを知ることができる。このような、伝統から外れた表現への傾斜は、俊頼という歌人の特質の一面としてだれしも認めるところであろう。為経が誹諧歌として俊頼の詠を多く採っているのも、彼の家集などを読んでそのような特質を認め、俊頼をいわば誹諧歌人として規定する視点を持っていたからであると考えられる。

ところで、D「秋の田に」の歌は『千載集』巻五・秋下にも入っている。『千載集』にも誹諧歌が立てられているが、Dは誹諧歌としてではなく、正統的な四季の歌として採られているのである。同じ歌について、『後葉集』の為経と『千載集』の俊成との間に見解の相違があったことがわかる。俊成にとって、「こともおろか」という語句は、正統的な四季の歌としての評価を妨げる程に俗的な表現であるとは思われなかったのであるう。

確かに、伝統的和歌表現からの逸脱という視点からみた場合、A~Dの歌は、俊頼の作としてはそれほど極端なものではない。『後葉集』に入らなかった同じ人の作と比べてみよう。

あさりせし水のみさびにとじられてひしのうきはにかはづ鳴くなり（散木奇歌集・二七八）

「水のみさび」「ひし」はそれぞれ次の万葉集歌に拠っていると考えられる。

衣手爾 水沢付左右 殖之田乎 引板吾波倍 真守有栗子

（巻八・一六三八）

君為 浮沼池 菱採 我染袖 沾在哉（巻七・一二五三）

万葉語をことさらに詠み込んでいこうとする積極性は、Aの歌以上のものであろう。また、

ささめかるあら田のさはにたつたみも身のためにこそ袖もぬるらめ（散木奇歌集・一〇一〇）

は、新奇な材料を詠み込んだものであり、B、C、D以上に極

端な例といえるであろう。右の二首の俊頼歌はいずれも『千載集』入集歌である。「あさりせし」の歌は卷三・夏に「ささめかる」の歌は卷十五・恋五に採られており、正統的な季の歌、恋の歌として評価されている。さらに著しく万葉的表現、俗的表現に傾斜した次の歌は、『千載集』においても誹諧歌として採られている。

したひくるこひのやつこの旅にても身のくせなれやゆふと

どろきは（散木奇歌集・九九九）

このようにみえてくると、A、Dの俊頼歌は彼の作としては、極端に伝統的和歌表現から逸脱していたとはいえないことがわかり、当時としてもそのように認識されていたであろうことが、ある程度窺われるのである。

俊頼の歌ばかりとりあげてきたが、他の歌人の後葉集誹諧歌についても触れておこう。

三月三日、桃の花をよめる

経信卿母

E 山賤のそのふにさける桃の花すけりやこれをうゑて見ける

よ（五四二）

（題不知）

読人不知

F たますだれいとのかえまに人をみてすける心はおもひかけ  
てき（五五一）

（題不知）

基俊

G くれ竹のあなあさましの世の中やありしやふしの限なるら

ん（五五三）

三の御子のいへにて、恋の心をよめる（基俊）

H ゆかちかしあなかま夜半のきりぎりす夢にも人にあひもこそすれ（五五四）

これらの歌については、一応、傍線を付した部分が俗的ないしは口語的表現であると判断されて誹諧歌に含められたとみることができよう（注11）。ところで、右の四首はいずれも勅撰集や他の私撰集に採られている。

E：三奏本『金葉集』卷一・春（七四）

F：『拾遺集』卷十一・恋一（六六三）

G：『統詞花集』卷十二・恋中（六〇二）、『千載集』卷

十八・雑下・誹諧歌（一一九一）

H：『新古今集』卷十五・恋五（一三八八）

このうち誹諧歌に入れられているのはGの『千載集』のみであり、その他は四季、恋の部立に採られている。時代は異なるが、それぞれの撰者によって四季、恋の歌としてある程度以上の評価を与えられたものであった。それぞれ俗的ないしは口語的表現を有するものの、誰の眼からみても誹諧歌と判断されるといふほどのものではなかったのである。

さて、以上に述べてきた為経の誹諧歌観は、『古来風体抄』にみられる次のような『詞花集』評と関わってくるであろう。

又地のうたは、おほくはみな誹諧歌の体に、みなざれをかしくぞみえたるべき。（注12）

既にとりあげてきたA、Cを含む五首の詞花集歌が『後葉集』

では誹諧歌として採られている。このような歌を四季や恋の部立に含む『詞花集』の一面を批判的にとらえ、伝統的和歌表現から逸脱していると目される歌を誹諧歌とする判断を示すことで、その批判を表明しようとしたのであろう。しかしながら、前述のように後葉集誹諧歌の俗的な、あるいは新奇な表現はそれほど極端なものではない。さらに極端な歌は、『後葉集』において採られるべくもなかったであろう。為経は、伝統的和歌表現から外れるところがありながらも、比較的その度合の軽微な歌を誹諧歌として自らの撰集にとり入れたものと思われる。

### 三

ところが、『後葉集』には、前節に述べたような視点からでは理解できない誹諧歌も含まれている。

(題不知)

崇徳院御製

I 瀬をはやみ岩にせかる、谷河のわれても末にあはんとぞ思

ふ(後葉集・五五二)

この歌には前節にみたような俗語的表現、非歌語は含まれていない(注13)。なぜこれが誹諧歌に入れられたのであるか。ここで注意されるのが、次の古今集誹諧歌の存在である。

(題しらず)

よみ人しらず

よひのまにいでていりぬるみか月のわれて物思ふころにも

あるかな(古今集・一〇五九)

Iの歌とは、上句が序詞的に第四句「われて」にかかっている点が共通している。Iの歌が『後葉集』で誹諧歌に入れられたのは、「よひのまに」の古今集誹諧歌と共通する表現、語句をもっていたからではないかと思われる。

以下、これと同様に古今集誹諧歌と類似する語句、表現を有する後葉集誹諧歌について検討する。

題不知

俊頼朝臣

Jこひしともさのみはいかがかきやらん筆のおもはんことも  
やさしく(後葉集・五五五)

(題不知)

よみ人しらず

なにをして身のいたづらにおいぬらむ年のおもはむ事もや  
さしき(古今集・一〇六三)

両歌とも上句が疑問表現をとって、三句切れになっている点で共通している。さらに、Jの歌の下句は古今集歌の「年」を「筆」に変えただけで他は一致している。ちなみに、次のような類例もある。

家づとにさのみなをりそ桜花山のおもはんこともやさしく

(基俊集・一九四)

いかにしてさらにこひしといひやらんきみがおもはんことも  
もやさしく(教長集・六九二)

右の教長歌はJの歌の影響下にあると思われる。

また、前節にも触れた、

三の御子のいへにて、恋の心をよめる (基俊)

H ゆかちかしかあなかま夜半のきりぎりす夢にも人にあひもこそすれ (後葉集・五五四)

については、次の古今集歌との関係を考えることができる。

(題しらず)

僧正へんぜう

秋ののになまめきたてるをみなへしあなかしかまし花もひと時 (古今集・一〇一六)

傍線部の表現に類似がみられる。

題しらず

和泉式部

K 竹の葉にあられふるらしさらさらにはひとりはぬべき心ちこそせね (後葉集・五五八)

(題しらず)

(よみ人しらず)

さかしらに夏は人まねささのはのさやぐしもよをわがひとりぬる (古今集・一〇四七)

右の二首は、「竹の葉」「ささのは」という題材をとりあげ、

その音を問題にしている点、さらに、「ひとりぬ」と言っている点が共通している。

つゝみけるをとこのおなじ心ならぬよしうらみける返

事に

(和泉式部)

しおのが身のおのがころにかなはぬをおもはば物をおもひしりなん (後葉集・五五九)

(題しらず)

(よみ人しらず)

思へどもおもはずとのみいふなればいなやおもはじ思ふか

ひなし (古今集・一〇三九)

われを思ふ人をおもはぬむくいにやわが思ふ人の我をおもはぬ (同・一〇四一)

右の二首の古今集歌では「思ふ」「われ」といった語が繰り返して用いられている。Lの後葉集歌にも「おの」「おもふ」が繰り返して用いられていて、ここに共通性を見いだすことができる。

以上のI、J、H、K、Lの例から、為経は、古今集誹諧歌との語句、表現の類似を、誹諧歌と判断する基準のひとつとしていたことがわかる。

この時代、誹諧歌といえば、当然、『古今集』のそれがただちに想起されであろう(注14)。前述のような為経の誹諧歌観は、そうした当時の一般性に還元できるようにもみえる。しかしながら、当時において為経に独自の面も存したと思われる。

Jの歌の場合は、作者自身が「なにをして」の古今集誹諧歌を意識していて、意図的にこれに類似した表現をとったことは明らかである。また、それが決して孤立した詠みようでなかったことを、前掲の基俊歌、教長歌の存在が裏付けている。これらには共通して古今集誹諧歌「なにをして」へのまなざしが読み取れる。J「こひしとも」の作者俊頼は古今集誹諧歌の詠風の再現を意図していたのかもしれない。そこまではいえないにしても、この歌の場合、古今集誹諧歌との類似はだれしも認めるところであらうし、それをもって誹諧歌とする判断



も当時の一般の見解に抵触しなかったであろうと考えられる。

ところが、Kの歌は事情が異なる。この歌については、第三句「さらさらに」が擬声語であり、かつ「更更」の意が掛けられていることも誹諧歌とされた一因として検討しなければならぬが、この点は今は措くことにする。Kの歌と類似表現をもつとして掲げた古今集誹諧歌「さかしらに」のうち、「ささのはのさやぐしもよ」という詩句が、清輔『和歌初学抄』の「古歌詞」の項にみえる。『和歌初学抄』は、冒頭に「歌をよまむにはまづ題をよく思ひとき心うべし（中略）古き詞のやさしからむを選びてなびやかにつづくべき也」（注15）とあり、これに続けて「古歌詞」を列挙しているので、ここには「古き詞のやさしからむ」ものが挙げられていると考えられる。そうすると、少なくとも清輔の意識では、「ささのはのさやぐしもよ」という詩句は、歌に詠み込むのにふさわしい、優美な表現であったことになる。古今集誹諧歌「さかしらに」の誹諧歌たるゆえんは、もっぱら「さかしらに夏はひとまね」という初句、第二句の口語調にあったと考えられる（注16）。そうすると、為経は本来誹諧性を有していなかった、しかも『和歌初学抄』の記載によれば清輔の美意識にかなっていた第三句以下の詩句との類似をもって誹諧歌と見なしたということになる。これは當時としても特異な態度であったと考えられる。

さらに問題となるのは、崇徳院の、

I瀬をはやみ岩にせかる、谷河のわれても末にあはんとぞ思

ふ（五五二）

であろう。この歌は『久安百首』個人別百首本には次の形でみえる。

ゆきなやみ岩にせかるる谷川のわれてすゑにもあはんとぞおもふ

『後葉集』の本文との間かなりの異同があるが、『詞花集』、『久安百首』俊成部類本は『後葉集』とほぼ同文である（ただし、いずれも第三句「たきがはの」）。『詞花集』の撰進に際して、作者崇徳院自身によって改作されたものと考えられる。Iの歌は、作者がこれに執着した、いわば自賛歌的なものであったと思われるのである。俊成が『古来風体抄』に採り、また、定家が『八代知頭抄』の恋二巻頭に据え、『百人一首』に入れるなど、後代の評価も高い。作者にとつては推敲を加えたほどの力作であり、ほぼ同時代から正統的な恋の歌として高く評価された詠であった。このIの歌には、一般に誹諧歌とされるような要素は、本来含まれていなかったと思われる。古今集誹諧歌と類似する表現を有していたのは偶然であろうし、その類似関係に留意してIを誹諧歌としたのは、おそらく為経だけであったであろう。為経の誹諧歌観には、当時の一般性に還元できない面のあったことが窺われるのである。

『後葉集』に『古今集』への復帰の志向が強く現れていることはすでに指摘されている（注17）。全体の部立構成を見るだけでもそれは明らかであるが、ここで注意しておきたいのはそ

の「復帰」なるものの内実である。

『後葉集』の巻頭、巻末部分には『古今集』の同じ箇所  
の歌と類似した語句、表現をもつ歌が置かれているところがある。

二、三の例を挙げておく。なお、『古今集』は(古)、『後葉集』は(後)と略す。

①春上・巻頭

(古) ふるとしに春たちける日よめる 在原元方

としのうちに春はきにけりひととせをこぞとやいはむこと  
しとやいはむ

(後) ふるとしに春たつ日 延久第三親王

年のうちに春たちくれれば一とせにふた、びまたるうぐひす  
の聲

②春上・巻軸

(古) 亭子院歌合の時よめる 伊勢

見る人もなき山ざとのさくら花ほかのちりなむのちぞさか  
まし

(後) 百首歌たてまつりけるに 右近中将教長

ふる里にとふ人あらば山ざくらちりなむ後をまてとこたへ  
よ

③恋一・巻頭

(古) 題しらず 詠人しらず

郭公なくやさ月のあやめぐさあやめもしらぬこひもするか  
な

(後) だいしらず よみ人しらず

をしか鳴秋の野はらのしのすゝましのびもあへぬ恋もする  
かな

①②では傍線部の語句がほぼ一致している。③の後葉集歌は古  
今集歌の「郭公」を「をしか」に変えれば直ちに得られるよう  
な歌である。この他、秋上・巻頭、物名・巻頭、恋二・巻頭、  
雑上・巻頭といった部分においても、同様の対応関係をみるこ  
とができる。撰者為経が、『古今集』との対応を図って、こと  
さらにこれらの歌を配したものであろう。巻頭、巻軸以外でも、  
『古今集』の対応する箇所と顕著に類似した詩句、表現をもつ  
ものがある。例えば、恋一のはば同じ位置にそれぞれ次の歌が  
ある。

かすがののゆきまをわけておひいでくる草のはつかに見え  
しきみはも(古今集・四七八)

かたをかのゆきまにねざすわかくさのはつかにみえし人ぞ  
こひしき(後葉集・二九九)

また、『後葉集』巻十九・雑四の前半は『古今集』巻二十に対  
応させる意識で編まれているが、次の歌には特に語句の類似が  
みられる。

(古) かひうた

かひがねをさやにも見しがげけなくよこほりふせるさや  
の中山(一〇九七)

(後) かひ歌にあひてあはぬ心を (三御子)

かひがねのかひもなくまたあひもみずさやの中山さやはおもひし(五六五)

今詳しく述べる余裕はないが、『後葉集』における『古今集』への復帰とは、『古今集』の本質を追究して抽出し、それを当代的に適用していくといったものではなく、『古今集』の語句、形態といった、いわば外面に注目し、これをそのままの形で再現しようとするものであった(注18)。前掲の対応箇所では、歌そのものの評価よりも、古今集歌と同じ素材を扱っていたり、語句、表現が類似していることが、集に採られここに配置される主要な基準となっている。『後葉集』の場合、歌の評価と、古今集歌に類似していることが、極めて密接に結び付いていたという言い方もできる。それは、『古今集』を絶対視する態度に基づいているのであろう。

誹諧歌の場合も、巻頭、巻軸などにおける対応と同様に考えることができる。ここでも、古今集誹諧歌の誹諧歌たる由縁は何であるかを追究して得られたものを誹諧歌認定の基準としているわけではないであろう。古今集誹諧歌の語句、表現の総体をその基準とし、これと類似するもののいくらかを『後葉集』は誹諧歌として集めたのであろう。その結果、本来「誹諧」の概念とは無縁の部分を経準としてK「竹の葉に」の歌を誹諧歌としたり、一般的には誹諧歌とは考えられないI「瀬をはやみ」を誹諧歌に入れるというような、当時の一般性から外れる面が、『後葉集』の誹諧歌にみられるようになったと考える。

#### 四

以上の考察から、『後葉集』には、俗的、口語的表現に注目する視点と、古今集誹諧歌との類似表現に注目する視点という、本来別々の二つの視点から誹諧歌と判断された歌が混在していることがわかる。もっとも、古今集誹諧歌の属性として俗語、口語を含むということを認めるならば、二つの視点は、必ずしも別々のものとはいえない。しかしながら、I「瀬をはやみ」やK「竹の葉に」をも誹諧歌に含めた事情を考え併せると、為経が古今集誹諧歌の誹諧歌たる由縁をつきつめて考えていたかどうか疑われるのであり、『詞花集』批判に関わる第二節に述べたような判断基準と、『古今集』への追従からくる第三節に述べたような基準とが併存していたとみるべきであろう。かくて成った誹諧歌群は当時であっても特異な点を有するものであったと考える。

このように二つの視点が併存することになった理由は何であるろうか。

歌合判詞において誹諧歌といった場合、俗的、口語的表現を有する歌を呼ぶことが多い(注19)。そのとき多くは否定的ニユアンスを伴っている。為経の誹諧歌観のうち第二節に述べた側面は、このような歌合評語としての概念とほぼ等しいと考えられる。『後葉集』においては、それが『詞花集』への批判と

密接に結び付いていたといえるであろう。

ところが、いやしくも撰集において一歌群を形成する以上、誹諧歌が否定的意義のみを持つものであってはならなかったのではないか。ここにおいて誹諧歌が何らかの肯定的意義を有することが要求されたと思われるのである。俗的、口語的表現を含む歌を誹諧歌としながらも、あまり極端なものはこちらに入れないのも、そうした事情に関わるのであろう。

『奥義抄』下巻余の誹諧歌についての問答に次のような記述がある。

答云、漢書云、誹諧者滑稽也。(中略)誹諧の字はわざごとく、よむ也。是によりてみな人偏に戲言と思へり。かならずしも不然歟。今案に、滑稽のともがらは非道して、しかも成道者也。又誹諧は非王道して、しかも述妙義たる歌也。故に是を准滑稽。(注20)

誹諧歌は「王道」ではないが「妙義」を述べた歌であるとする。一見価値が無いようにでありながら、実は深い意義を有するという見解を示しているのである。これは、否定的にとらえられていた誹諧歌に肯定的な価値を見いだしていこうとする方向からなされた解釈であると思う。

『後葉集』の場合、撰者が絶対視していた『古今集』の誹諧歌と類似する歌を採り入れることで、誹諧歌に積極的な意義をもたせようとしたのであろう。しかし、それはまた、集全体にみられる著しい『古今集』追従の態度、『古今集』の形態をそ

のままに再現しようとする方針の一環を成すものであり、ここにおいては古今集誹諧歌とは何かという本来的な問題はほとんど顧みられていなかったであろう。そのような事情から、為経の誹諧歌観が、第三節に述べたような特異な側面を持ち合わせるようになったと考える。

このように、後葉集誹諧歌に特殊の状況をみてくると、これをもって当時の誹諧歌観の一面を代表させるのは危険であると考ええる。そのような意味から、後葉集誹諧歌の存在が、上條氏の言われるような「古今的誹諧歌の流れ」が「消滅していなかった」ことの一証左となりうるかは、なお微妙な問題と言わなければならない。

平安時代の末期は、和歌の実作および批評において、その方向性を模索していた時代であったといえる。そのなかで多様な見解、主張が存在したものと思われる。そして、このような状況が、この時代に私撰集が多く編まれる契機にもなっていたのであろう。『後葉集』もその中で生まれた撰集のひとつであった。

いま述べたような状況を踏まえ、この時代に共通の基盤とそこから外れた特殊な面とを、各々の作品や歌人についてできるだけ正確に把握しながら、それぞれの和歌観を見極めていく態度が要請されるであろう。本稿はこのような視点からのささやかなアプローチであった。

注

(1) 引用は佐佐木信綱編『日本歌学大系』(昭和二三年 風間書房)による。

(2) 現代においても古今集誹諧歌とは何かについては様々に議論されている。当然追究されなければならない問題であるが、本稿ではこれには立ち入らないことにする。なお、「誹諧歌」を「ヒカイカ」と読む説もあるが(すでに『奥義抄』に「誹音非也。無俳音」の指摘あり)、本稿では平安時代末期の理解に即して「ハイカイカ」とよみ、「俳諧歌」と同義に考える。

(3) 上條彰次「誹諧歌の変貌(上)(中)(下)」(『静岡女子大学国文研究』七、八、九 昭和四九年三月、昭和五〇年二月、昭和五一年三月)。「後葉集」については「中」に述べられている。

(4) 後に掲げるC「かぜふけば」の歌は、『詞花集』では「惟宗隆頼」の作とされる。『後葉集』のこのあたりは書陵部一本(注5参照)しか現存せず、また『後葉集』中の俊頼歌のうち『散木奇歌集』にみえないのはCの歌のみで、不審であるが、一応書陵部本の表記にしたがって、『後葉集』においては俊頼の歌として扱っておく。

(5) 『後葉集』の引用は宮内庁書陵部本(五一〇・三三三)

『新編国歌大観』二の底本)により、歌番号は『新編国歌大観』二(昭和五九年 角川書店)による。引用に際して仮名遣いを改めたところがあり、また、私に濁点を付した。(6) 以下、特に注記しない限り、歌集等からの引用・歌番号は『新編国歌大観』による。

(7) 菅根順之『詞花和歌集全釈』(昭和五八年 笠間書院)による。

(8) 久曾神昇編『日本歌学大系』別巻四(昭和五五年 風間書房)による。

(9) 例えば、同時代の撰集について、『堀河百首』からの採歌状況をみると、万葉的表現を含む歌は、『詞花集』の堀河百首一〇首中に二首、『統詞花集』の一九首中に四首、『千載集』の七七首中に一〇首入っている。ところが『後葉集』に入集した堀河百集歌三七首中に万葉撰取歌といえるものは皆無である。

(10) 伊藤嘉夫校注・日本古典全書『山家集』(昭和二二年 朝日新聞社)、久保田淳『西行山家集入門』(有斐閣新書 昭和五三年)に指摘がある。

(11) Eについて、『後拾遺集』巻二十・雑六の誹諧歌に、  
となりより三月三日に人のもの花をこひたるに

大江嘉言  
ももの花やどにたてればあるじさへすける物とや人の  
見るらむ(二二〇二)

があり、この先例に倣ってEの歌を誹諧歌に含めたものかもしれない。同様のことは、Hの歌と後拾遺集誹諧歌、

まだちらぬ花もやあるとたづねみんあなかましばし風  
にしらすな(一一〇一 実方)

についても考えられる。今はこの問題は措く。

12) 佐佐木信綱編『日本歌学大系』第二卷(昭和三十一年 風間書房)所収の初撰本による。

13) 久富木原玲氏は「戯れ歌の時代―平安後期和歌の課題―」(『国語と国文学』六三・七 昭和六一年七月)において、Iの歌をとりあげ、古今集誹諧歌「よひのまに」との関係に触れつつ、「われても」を「口語的表現」とみておられる。しかしながら、次のような例からみても、「われて」を口語表現であったとするのには無理があると思われる。

紀貫之、曲水宴し侍りける時、月入花灘暗といふ  
ことをよみ侍りける 坂上是則

花ながすせをも見るべきみか月のわれていりぬる山の  
をちかた(新古今集・巻二・春下 一五二)

14) (注13) 久富木原論文参照。

15) 『日本歌学大系』第二卷による。

16) 竹岡正夫『古今和歌集全評釈』(昭和五十一年 右文書院)に「『さかしらに夏は人まね』は舌足らずな口語調。『笹の葉のさやぐ霜夜をわが一人寝る』というのは全く雅なる和歌の世界のことであるが、されが『さかしらに夏は人ま

ね』という口語調まる出して、ぼつりとやっているところにおどけた表現がある。」と述べられている。

(17) 谷山茂「千載集と諸私撰集―類型と個性とに関する基礎的一調査―」(『人文研究』二・一一 昭和二十六年一月)、樋口芳麻呂「詞花和歌集雑考」(『国語国文学報』

五 昭和三十〇年 二月)、谷山茂「詞花集をめぐる対立―拾遺古今・後葉・統詞花の諸問題―」(『人文研究』一 三・五 昭和三十七年六月)など。

(18) この問題も含めて、『後葉集』全体の性格については、別稿を予定している。

(19) 上條彰次「誹諧歌と俊成」(『国語国文』四四・八 昭和五〇年八月)、(注13) 久富木原論文参照。

(20) (注1) 『日本歌学大系』第一卷による。

△付記▽本稿は和歌文学会第三三回大会(一九八七年一〇月)における口頭発表に補正を加えたものである。大会の席上、御教示を賜った上條彰次、松野陽一の両先生に厚く感謝申し上げる。

(本学大学院博士後期課程)